

春の日差しに目映いばかりの桜が咲き誇る海津大崎。竹生島を目の前に望む奥琵琶湖の景勝地は今、「桜の回廊」が人々を魅了しています。

海津という地名が示すように港として使われてきました。その歴史は平安時代にさかのぼるようです。

中世には塩津と並ぶ重要な津として、敦賀で船から陸揚げされた年貢米などが「七里半越」と呼ばれる陸路で海津まで運ばれ、船で坂本を経由して京都にまで運ばれたという記録が残っています。

江戸時代に入ると大部分は大和郡山藩の所領となり、代官所が置かれ、西近江路（北国海道）の宿場の一つとしてにぎわうとともに港町として繁栄しました。

このように、海津は湖上と陸上の結節点として重要な役

割を果たしました。享保年間（1716～1736年）には、100石積以上の船が8隻、50石積以下の船が22隻あったといわれています。

海津周辺は、地理的には琵琶湖の幅が最も広い部分に位置することから、季節風による波風の影響を強く受けます。波風を防ぐため家屋には垣や板戸を用い、湖岸には石積みや築くなどの対策が重要な生活の知恵でした。

海津、西浜にかけて現存する湖岸の石積みは、海津に残る記録によれば天和2（1682）年にはすでに築かれていたとされ、また西浜に残る記録によると、元禄15（1702）年に当時の代官、西与市左衛門が、たびたび風波による被害を受け、築造したと伝えられています。

こうした石積みは修復を重

海津の石積み



地域の生活や生業などを伝える、国の重要な文化的景観に指定されている海津の漁協④と石積み⑤



川漁業者組合の旧倉庫があります。近代になっても、西漁港は蒸気汽船の運航や石灰の積み出し港として、湖上交通の要衝の役割を担い続けます。旧倉庫は、そのような時代の景観を伝える重要な建物であり、町家は街道沿いの宿屋や商店として宿場町の面影を残すものです。

ねて現在も受け継がれ、全長約1・2^{km}、高さ2・5^m以前後の石積みが湖岸の景観をつくっています。

重要文化的景観とは「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」と定められています。

季節風対策が重要景観に

この石積みを含めた高島市マキノ町海津、西浜、知内の湖岸一帯および知内川と琵琶湖を含む約1842^{ha}は「高島市海津・西浜・知内の水辺景観」として、平成20年3月に国の重要な文化的景観に選定されました。

石積み以外で重要文化的景観に選定されたものには、江戸時代末期に建てられた木造の町家5棟と、海津、知内両漁港の近くにそれぞれ建っている海津漁業協同組合と知内

（滋賀県文化財保護協会

中村健二）